

# 学会教育委員会の現状\*1

橋本 信也\*2

## はじめに

学会教育委員会の歴史は新しい。この委員会発足の経緯については前版で西園昌久教授が詳細に述べられているので<sup>1)</sup>参照していただきたい。

日本医学会加盟の各分科会は、学術研究を目的とした活動のほか、卒前教育のカリキュラムや卒後臨床研修、さらには生涯教育セミナーなど、専門領域における教育活動を各学会が独自に行っている。しかし、学会の壁を越えたお互いの情報交換の場はこれまでになかったため、日本医学教育学会では学会教育委員会協議会を設置したのである。

## 1. 学会教育委員会協議会のあゆみ

第1回協議会は第29回日本医学教育学会大会と合わせて開催された。現在までに7回行われている。開催年月日と協議会内容の一覧を表1に示す。

第1回協議会には35学会40名が参加し、各学会からの医学教育改善への取り組みと題して有益な発言があった。特に表1に掲げた6学会からは資料をもとに説明があった。

その際、各学会の医学教育に対する取り組みについて実態ならびに意向調査をすることが決定された。このアンケート調査の結果は既に報告されている<sup>1)</sup>。

第2回協議会では先に行われたアンケート調査の集計結果が報告された後、各学会の教育活動報告として表1に掲げた7学会から発言があっ

た。また、平成9年7月、日本学術会議、第16期第7部会が提案した「医学教育センター設置について」に関してその後の報告と討議があった。

第3回協議会では、初めに文部省（当時）21世紀医学医療懇談会教育部会長の鈴木章夫東京医科歯科大学長から文部省が考えている医学教育改革の方向性について講演していただいた。医学部における教育体制の改善、特にカリキュラムの改革、適切な進級システム、臨床実習の充実などは現在行われている医学教育改革の基盤となっている。次いで、統合カリキュラムのモデル(1)として、杏林大学における解剖学教育の事例が平野寛教授によって報告された。さらに日本医学教育学会が推進している医学教育センター構想についてその後の動きが報告された。

第4回協議会からは各学会の教育委員会活動報告を2~3の学会に絞って発表してもらうこととした。初めに日本寄生虫学会から第67回寄生虫学会シンポジウム「寄生虫学教育の新しいとり組み」について金田良雄教授が紹介された。次いで日本老年医学会井口昭久教授がわが国の卒前学部教育における高齢医学学習の現状と将来への展望について述べられた。もう1つの議題は統合カリキュラムのモデル(2)として高知医科大学の事例が、田口博國教授によって報告された。

第5回目ぐらいになると、この協議会のプログラムも大分安定してきた。熱心に教育活動を行っている学会にお願いしてその取り組みを紹介してもらうことと、その時の各学会間におけるトピックを出席者で討論することになった。

第5回協議会では初めに統合カリキュラムのモデル(3)が行われた。今回は東北大学の例で柳沢輝行教授が報告された。コア・カリキュラムの導入、統合カリキュラムの推進のためには、各講座の壁を越えた専門教育の調整が重要であるだけ

\*1 The Joint-Committee of Committees for Medical Education in Medical Societies in Japan

キーワード：学会教育委員会協議会、日本医学会分科会、医学教育センター、統合カリキュラム、コア・カリキュラム

\*2 Nobuya HASHIMOTO 医療法人元氣会横浜病院

表1 これまで開催された学会教育委員会協議会

回	年月日	協議会内容	場所
1	平成9年7月17日	各学会の教育活動報告：日本生化学会，日本法医学会，日本リハビリテーション医学会，日本医療情報学会，日本神経学会，日本病理学会	金沢市文化ホール
2	平成10年2月26日	1. 各学会の医学教育への対応についての実態調査らなびに意向調査報告 2. 各学会の教育活動報告：日本解剖学会，日本耳鼻咽喉科学会，日本老年医学会，日本薬理学会，日本精神神経学会，日本臨床病理学会，日本寄生虫学会 3. 日本学術会議提言「医学教育センター設置に向けて」報告	アルカディア市ヶ谷（私学会館）
3	平成10年7月16日	1. 文部省21世紀医学医療懇談会教育部会の動向 2. 統合カリキュラムのモデル（1）杏林大学解剖学の例 3. 医学教育センターの実現化	日大会館
4	平成11年2月3日	1. 学会教育委員会の問題点と解決策：日本寄生虫学会，日本老年医学会 2. 統合カリキュラムモデル（2）高知医科大学の例	国際文化会館
5	平成11年12月9日	1. 統合カリキュラムのモデル（3）東北大学の例 2. 各学会教育委員会報告：日本内科学会，衛生学公衆衛生学教育協議会，日本輸血学会 3. 医学教育センター（仮）プロジェクト委員会（日医）報告	アルカディア市ヶ谷（私学会館）
6	平成13年2月11日	1. コア・カリキュラムのめざすもの 2. 各学会教育委員会の教育活動への取り組み：日本生理学会，日本救急医学会	津田ホール
7	平成14年1月18日	1. 共用試験のめざすもの 2. 各学会教育委員会の教育活動への取り組み：日本細菌学会，日本脳神経外科学会	津田ホール

に、各学会の教育担当者間のこうした話し合いの場が必要であることを痛感させられた。各学会教育委員会報告は、日本内科学会、衛生学公衆衛生学教育協議会、日本輸血学会から行われた。日本内科学会からは荒川正昭教授が内科の2段階の認定制度、研修カリキュラム、教育病院の認定基準などについて説明された。日本衛生学会と日本公衆衛生学会は合同で教育協議会を設置されているそうであるが、稲葉裕教授から大学院修士課程新設問題、コア・カリキュラム立案、医師国試への対応などが報告された。日本輸血学会からは倉田義之教授が、わが国の輸血学教育の実態調査が報告されたが、私立大学で輸血学の教育が乏しいとのことであった。終わりに毎回議論が続けられている医学教育センターについて報告があった。医学教育の改善を図るためには、WHOが勧めて

いる National Teacher Training Center (NTTC) が有効であることから、日本医学教育学会では牛場元会長時代からその設立を悲願としてきた。先にも述べたように、平成9年に日本学術会議がその設立に関して勧告したことを契機として、日本医学教育学会でも特別委員会が設置された。さらに日本医師会でもプロジェクト委員会が組織され、その動きが活発化してきたことが報告された。そして今回の出席者に医学教育センター設立についての意見をアンケート形式で伺ったところ、出席者全員から設立に賛成という結果が得られた。しかも入試、学部教育カリキュラム、臨床実習、医師国試、臨床研修、生涯教育に至る一貫した教育体制を見直す組織が必要であるという意見が大半を占めた。

第6回協議会では平成12年11月に文部省か

ら出された「医学教育モデル・コア・カリキュラム試案」をまとめられた佐藤達夫東京医科歯科大学医学部長からお話を伺った。これは21世紀医学医療懇談会（第3回協議会における議題）の提言を受けて具体的に作成されたものであり、良き医師育成のために学部教育で真に必要なカリキュラムはどういうものかを示したものである。参加者から活発な質問、意見が出された。学会教育委員会の教育活動の取り組みとしての報告は日本生理学会と日本救急医学会であった。日本生理学会は古くから学会としての教育活動が活発であることが知られており、特に臨床系各科目の根底に位置する学問であることから、来るべきコア・カリキュラムの立案を認識して改善が行われていることが佐久間康夫教授から報告された。日本救急医学会は、大学における救急・災害医学教育の現状について小林国男教授が報告された。阪神・淡路大震災にみるまでもなく、わが国における災害医学の再認識と同時に、救急医学の卒前、卒後教育のさらなる充実が、日本医師会救急災害医療対策委員会のアンケート調査をもとに説明された。

第7回協議会では最初の議題として、臨床実習開始前の学生評価のための共用試験が上げられた。学生が臨床実習を始める前に最低限修得しておかねばならない知識、技能、態度について、適正な評価を行うシステムの確立が望まれていたが、コア・カリキュラムに掲げた学習目標に到達できたか否かを客観的臨床能力試験を含めて全国統一に行うという今回の試みは極めて意義のあるものとされている。今回も前回に引き続いて佐藤達夫東京医科歯科大学上席学長特別補佐からご講演をいただいた。現在最もホットな話題であるだけに、今回は46学会55名の参加者があった。学会教育委員会の教育活動への取り組みは、今回は日本細菌学会と日本脳神経学会からの報告であった。日本細菌学会からは吉田眞一教授が、細菌学教育の現在の問題点を指摘された。再興・新興感染症など社会的問題があるにもかかわらず、現場の教育は必ずしも十分とは言えず、臨床を視野に入れた病原微生物学の教育が重要である

ことが強調された。また現在、医学部学生を対象にした微生物学セミナーを夏期合宿の形で行って学生の動機づけを行っていることなどが紹介された。日本脳神経外科学会の教育活動については認定専門医制が吉本高志教授より紹介された。脳神経外科専門医は日本医学会分科会の中でも認定専門医制は3番目に古く施行されたという（昭和41年）。確かに麻酔科医などと同様、脳神経外科は極めて高度に分化した領域であるだけにきめの細かい認定試験が要求されるものと思われる。それだけに長い年月の間によく整えられた周到な専門医認定試験が行われていることが理解できた。

### おわりに

本来、学会は学術の研究を目的とした学者の組織であり、その活動は研究成果の発表にある。しかし、学会もひとり象牙の塔に立てこもるだけでなく、広く社会に貢献することも要求されている。その意味において各医学会に所属する研究者は、若い世代に対する教育を行うことも責務の1つであり、現実に各学会とも教育関連の委員会を設置している。ある学会は卒前学部教育のカリキュラムの改革を目指し、またある学会は卒後臨床研修プログラムや認定専門医制について取り組んでいる。時恰もコア・カリキュラムの設定、さらに全国規模の共用試験の実施など、これまでのように～ology的単一学問領域だけの議論では済まされなくなった。今後、統合カリキュラムへの大幅な転換を視野に入れたとき、本委員会の果たす役割はさらに大きいものと思われる。その意味において、本委員会設置を意図された本学会前会長・堀原一先生の慧眼と本委員会を長きにわたり主宰されてきた西園昌久先生のご努力に敬意を表する次第である。

### 文 献

- 1) 西園昌久：学会教育委員会の現状。医学教育白書1998年版（日本医学教育学会・編）、篠原出版、東京、1998、89-99